



Title	漱石の時間 : <継続中>と<一体二様の生>
Author(s)	安東, 璋二
Citation	語学文学, 34: 3-17
Issue Date	1996
URL	http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/8369
Rights	本文ファイルはNIIから提供されたものである。

漱石の時間 — 〈継続中〉と 〈一体二様の生〉

安 東 璋 二

一

『硝子戸の中』は、漱石晩年の心境をつたえるものとして、漱石の作品の中でもとくに注目されるものだが、その心境を集約的に示すものとして、継続中ということばがよく引用される。

漱石を訪ねる人の多くが、漱石にもう病氣は癒ったのか、と聞く。そのたびに漱石は返答をためらったあげく、「え、まあどうか斯うか生きてゐます」と言うのだが、何かしっくりしない。ある日T君が来たのでその話をする、T君はすぐに「そりゃ癒ったとは云はれませんね—まあ故の病氣の継続なんでせう」という。

—此継続といふ言葉を聞いた時、私は好きな事を教へられたやうな気がした。それから以後は、「何うか斯うか生きてゐます」という挨拶を已めて「病氣はまだ継続中です」と改めた。さうして其継続の意味を説明する場合には、必ず欧州の大戦を引合ひに出した。「私は丁度獨乙が聯合事と戦争をしてゐるやうに、病氣と戦争をしてゐるのです。(略)私の身体は乱世です。何時どんな変が起らないとも限りません。」

そう答えて、客の帰った後で漱石はまた考える。

—継続中のものは恐らく私の病氣ばかりではないだらう。私の説明を聞いて、笑談だと思つて笑ふ人、解らないで黙つてゐる

人、同情の念に駆られて氣の毒らしい顔をする人、—凡て是等の人の心の奥には、私の知らない、又自分達さへ氣の付かない、継続中のものがいくらでも潜んでゐるのではなからうか、もし彼等の胸に響くやうな大きな音で、それが一度に破裂したら、彼等は果たして何う思ふだろう。彼等の記憶は其時最早彼等に向かつて何物をも語らないだろう。過去の自覚はとくに消えてしまつてゐるだらう。今と昔と又其昔の間に何等の因果を認める事の出来ない彼等は、さういふ結果に陥つた時、何と自分を解して見る氣だらう。所詮我々は自分で夢の間に製造した爆裂弾を思ひ／＼に抱きながら、一人残らず、死といふ遠い所へ、談笑しつゝ歩いて行くのではなからうか。唯どんなものを抱いてゐるのか、他も知らず自分も知らない、仕合せなんだらう。

(三十)

継続中ということばが氣に入つたのは、自分の身体のことだけではなく、それがかねがね漱石に内在していた意識を適切に言うものであったからである。己れのみならず、人間はみな、自分の内部に継続中のものをかかえている。この意識に先駆するものは、すでに若いころから漱石にわだかまっていたものである。たとえば、「不測の変下界に起り、思いがけぬ心は心の底より出で来る」という明治二十九年の『人生』がそれを語っている。

「不測の変」とは、ここでは「何時いつどんな変が起らないとも限かぎらない私の身体であり、同時に人がそれぞれ「夢の間に製造した爆裂弾」である。人が生きるといふことは、心にも身体にもそういう「不測の変」をかかえて生きてゆくということにほかならない。継続中というのは、そういう「不測の変」がつねに内在している生のことであり、一方ではそういう「乱」を必然的にかかえこみながら、物理的に継起する時間の継続の中に、そういう生の実感を見失ってゆく、われわれの日常的な生の時間の空虚を指摘するものだとも考えられる。「自分達さえ気の付かない継続中のものが（略）それが一度に破裂したら、彼等は果たして何う思ふだらう。」「今と昔と又其昔の間に何等の因果を認める事の出来ない彼等は、さういふ結果に陥った時、何と自分を解釈して見る気だらう。」というのはそういうことである。

重ねていえば、継続中ということばは二つのことを語っている。ひとつは、物理的に継起して、そのまま流れてゆく生の時間の継続であり、さらには、その日常的に継続する生がひそかにかかえていゝる「不測の変」のことである。その「不測の変」といふのは、何の因果もなく、突然「破裂する」ものではない。それは結局のところ「自分で夢の間に製造した爆裂弾」であり、己れの過去の中にその因果の鎖がつながっていたはずのものである。しかし、物理的に継起してゆく日常の生の時間の中、「過去の自覚はとくに消えてしまつてゐる」のが、多く人の生というものであるらしい。

漱石は継続中ということばを、己れの生の意識に符合させながら、そういう生の自覚を持たぬまま、結局「死といふ遠い所へ、談笑し

つゝ歩いて行く」世の人達を羨んでいるようである。先の引用文につづけて漱石は継続中についての文章をこう結んでいる。

私は私の病気が継続であるといふ事に気が付いた時、欧州の戦争も恐らく何時の世からかの継続だらうと考へた。けれども、それが何処から何う始まって、何う曲折して行くのかの問題になると全く無知識なので、継続といふ言葉を解しない一般の人を、私は却て羨しく思っている。（三十）

いまそれに触れる余裕はないが、ここでも漱石らしいのは、自分の病気の継続と、欧州の戦争の継続を重ねていることである。漱石はこの戦争が何処から始まって何う曲折するかに全く無知識なので、継続という言葉解しない一般の人を却て羨しく思うという。欧州の戦争の因つて来るところに無知識であることが、なぜ一般人の継続という言葉への無理解に対する羨望になるのか。いささか奇異に思われるが、己れの身体と、戦争を重ねて継続という言葉で説明したい漱石にとっては、その一方の因果の理が明らかでないことが、どこかで意識の不安になるのである。いずれにしろ「私の身体は乱世です」といふかたちで継続する生を自覚する漱石には、そういう意識の拘泥がなく、「唯どんなものを抱いてゐるのか、他も知らず自分も知らないで、仕合せなんだらう」といふ一般の人の「仕合せ」の位置に自足することは許されない。しかもまた、そういう無自覚な生の危うさと、無感動に堪えられないというのも、その言葉の一方が語る意識であることも明らかである。

同じ『硝子戸の中』の文章で、漱石に「悲痛を極めた」告白をして、その身の処置を相談する若い女の話がある。彼女は漱石が小説

を書く場合に、其女の始末をどうするかと聞き、さらに、女の死ぬ方が宜いと思うか、生きてるように書くか、と二者択一の答を求め、漱石は仕方なしに、生きるという事を人間の中心点として考えればそのままに居てもいいが、「美しいものや気高いものを一義に置いて人間を評価すれば問題が違って来るかも知れ」ないと答える。先生はどちらを擇ぶのか、と聞かれて漱石がまた躊躇している。と女はこういう。

「私は今持つてゐる此美しい心持が、時間といふものの為に段々薄れて行のが怖くって堪らないのです。此記憶が消えてしまつて、たゞ漠然と魂の抜殻のように生きてゐる未来を想像すると、それが苦痛で苦痛で恐ろしくって堪らないのです。」(七)

漱石は女を送つた後、その「むせっぽいやうな苦しい話」を聞かされて「却て人間らしい好い心持を久し振に経験した」気持ちになり、「それが尊い文芸上の作物を読んだあとの気分と同じものだといふ事に」気が付く。

漱石の心にはちょうどそのころ、「死は生より尊い」という言葉が往来するようになっていた。しかし漱石は、「つひに」其人に死をすすめる事が出来ない。「既に生の中で活動する自分を認め、又其生の中に呼吸する他人を認める以上は、互の根本義は如何に苦しめても如何に醜くても此生の上に置かれたものと解釈するのが当り前」だからである。漱石は女に、「凡てを癒す『時』の流れに従つて下れ」という。女は「さうしたら此大切な記憶が次第に剥けて行くだらう」と嘆く。女にはその「回復の見込みのつかない程」の深い胸の傷が同時に「普通の人の経験にないやうな美しい思ひ出の種

となつて」いたからである。公平な「時」は彼女の傷を次第に癒しながらまた、「烈しい生の歓喜を夢のやうに暈してしまふ」のだ。

私は深い恋に根ざしてゐる熱烈な記憶を取り上げても、彼女の創口から滴る血潮を「時日」に拭はしめようとした。いくら平凡でも生きて行く方が死ぬよりも私から見た彼女には適當だったからである。／＼斯くして常に生よりも死を尊いと信じてゐる私の希望と助言は、遂に此不愉快に充ちた生といふものを超越する事が出来なかつた。(八)

継続する生の時間というのは、どんな痛切な体験や記憶をも、やがて平凡な生の表情の中にとかしこんでしまふ。まさに「時は力」(二十一)なのである。女はその「力」の中で、大切な記憶が剥かれて行くのを嘆く。しかしその輝いた時を絶対の時にするには、そこで生の時間を止めてしまふしかない。「死は生よりも尊い」というのはそういう時への願望につながっている。この生の逆説は、『硝子戸の中』の前に書かれた『ころ』の先生の生を連想させる。

先生はKの自死以来、その生の時間の針を、その現在で止めてしまふ。先生は「魔物に一生つきまとはれるやうな気持」で、Kの死の記憶から逃れられない。それははじめKによって呪縛された時間といえるものであったが、それはいつか先生が、その時間の中に自らを置いて、「死んだ気で生きて行こう」という逆説的な生への意思に転化する。「死んだ気で生きてゆく」というのは、通常的には、現実的な生へ上昇する意思を意味するが、ここでは文字通り「死んだ気で」生きてゆくのである。生きながら死者の時のように、世外の時間にいるということである。

若い書生の私が、先生に不思議に惹かれるのは、そこに流れている時間が、自分達の日常的な時間と違うものを、「直感」したからである。先生の時間は外部とかかわりなく、先生の内部だけに流れている。その時間は、Kの死以来の二十年間を、その過去の一点に凝縮し、まるでそこに逆行してゆくような時間であった。

これを『硝子戸の中』の女の意識に符合させて考えれば、先生における凄惨な愛の確執の記憶は、時とともに剝がれてゆくものではない。むしろその意味は、時とともにより謎を強め、深く濃密になってゆく。むしろ先生が時の力でそれを治癒しようとしなかったからであり、また治癒しようとしてもそれができなかったからである。できなかったのは自分が明治の人間だったからだ。先生はいう。しかしここでいう「明治の精神」に十分な説得力があるかどうかは問題である。そのことはいま措くとして、先生の過去に留まる記憶は、『硝子戸の中』の女の恋愛のような、深く傷つきながら、「宝石」のように美しい、「生の歓喜」にみちたものではない。Kの凄惨な死で彩られるその記憶は暗黒の時間といってもいい。しかしその暗黒の一点に立ちどまる以外に、先生の生の時間の意味はない。

青年の私が、先生を文字通り、この世における唯一の「先生」として、自分の肉親よりもかえがたい存在のように惹かれてゆくのは、そこに内在する非日常的な時間の生に、「生きた思想」を感じるからである。そこにこそ本当の生の熱い血が流れていると思われたからである。この本質的な時間への憧憬、欲求は、つまるところ『硝子戸の中』の女の、絶対的な時への執着に重なるものだ。

『こゝろ』の隠された主題は自殺である、と柄谷行人はいう。

「それは、先生の自殺が作品の構成的必然としてではなく、作者の願望のあらわれとしてあるということである。友人を裏切ったという感情が、あるいは明治は終わったという終末感が、この作品をおおっている暗さや先生の自殺決行に匹敵しないことは明瞭だからだ」というのは、たぶんその通りだろう。先生の時間は、死によってしか完結しない。Kの鮮烈な血の記憶を風化させずに完結するとすれば、自死によってその時間を凝固するしかない。この意味で『こゝろ』が、進行する汽車の中で、語り手の私が先生の遺書を読む時間で終るのは象徴的である。『こゝろ』が私の回想する過去の物語であるにかかわらず、読者は先生の遺書を現在形として読み終えるのである。先生の時間はそのまま読者の中で生きつづける。

「記憶して下さい。私は斯の様に生きて末たのです」と先生はその遺書で言い得た。つまりそう言い得たのもそれが遺書だったからである。ここには「死は生より尊い」という『硝子戸の中』の作家の意識が重なっている。しかし現実の作家は、小説中の「先生」ではない。漱石は女の話に「尊い文芸上の作物を読んだあとの気分と同じもの」を感じるが、女に対してついに死ねとは言えない。「斯くして常に生よりも死を尊いと信じてゐる私の希望と助言は、遂に此不愉快に充ちた生といふものを超越する事が出来なかつた」のである。現実には「文芸上の作物」にはなりえない。

二

継続中という意識を『こゝろ』の先生の立場で考えれば、先生は「不測の変」に際会し、「思いがけぬ心は心の底より出で来る」

人間の意識に戦慄し、死ぬまでそこに「何等の因果」があるのか、そこに立ち止まりつづけて考えた人間である。それは継続中、という意識を正に日常の生の危うさとして考える作家の分身的存在であったといえる。しかしその一方で漱石は「既に生の中で活動する自分を認め」その「根本義」を「此生の上に置かれたものと解釈」せざるを得ない立場で、『硝子戸の中』の女に、死よりも生きることをすすめる作家である。漱石はここであらためて、その「不愉快な生」を生きつづけなければならぬ己れの位置から、その自己の生の意味をたずねなければならない。『道草』は、いわばそういう意識の連絡で、『こゝろ』を書いた作家が、当然書かなければならなかった作品世界だったと思われる。

『道草』は、漱石唯一の自伝的な小説として注目されることが多いが、内実は、漱石帰国後間もない二年間の生活に則しているように、その時間や現実には、かなり思いきった編集、改変が行われていることは知られている。当時の漱石の公的社会的生活の方面はほとんど捨象され、世界は妻と親族縁辺の私的な人間関係に収束され、時間の転位なども自在に行われている。その点だけでもこれが自然主義風のリアリズム小説でないことは明らかだが、私見によれば、この『道草』の時間と方法は、一見これとは対蹠的な虚構小説フィクションと見られる『こゝろ』と相似するものが多い。

『こゝろ』の先生の時間は、のべたように過去の一点に停止し、そこで人間の生や存在の意味を問いつづける。『道草』の時間も、帰国後の二年間にさかのぼって凝縮され、そこから遠い生い立ちの時間まで、自己の生や存在の位置をたずねるように記憶が辿られる。

この『こゝろ』と『道草』の間に暗合する時間と空間の世界と、明らかに脈絡しているのが、『硝子戸の中』の作家の意識である。その内実を象徴的に集約するのが、継続中という言葉である。たとえば、この継続中という意識が、『道草』の健三の、「片付かない」という意識に照応することは、よく指摘されるところである。

『道草』の終末、島田との面倒が決着して、細君が、これで片付いてよかったというとき、健三は、片付いたのは表面うぶだけだ、といい、さらにこうつづける。

「世の中に片付くなんてものは殆どありやしない。一遍起った事は何時迄も続くのさ。たゞ色んな形に変わるから他ひとにも自分にも解らなくなる丈の事さ。」(百二)

『道草』は、かつての養父島田の突然の出現にはじまり、そこから生ずるトラブルが、一段落するまでを話の核とする小説だが、健三の、「世の中に片付くなんてものは殆どありやしない」というのは、「世の中」ということばにも示されるように、単に突然生じた島田とのもつれた関係によって生じた実感ではない。それはすでに彼の日常をおおう意識である。

彼の心のうちでは死なない細君と、丈夫な赤ん坊の外に、免職にならうとしてならざる兄の事があった。喘息で斃れやうとしてはまだ斃れずにゐる姉の事があった。新しい地位が手に入るやうでまだ手に入らない細君の父の事があった。其他島田の事もお常の事もあった。さうして自分と是等の人々にとの関係が皆みんなまだ片付かずにあるといふ事もあった。(八十三)

「片付かない」のは、彼の日常生活や人間関係そのもので、島田

やお常の事は、その一端の象徴にすぎない。『道草』はいわば、片付かないその日常の生を描いた小説である。「一遍起こった事は何時迄も続くのさ。たゞ色んな形に変わるから他にも自分にも解らなくなる丈の事さ」というのは、漱石の継続中という意識の説明にそのまま重なつてゆく。

元日についての、健三の意識もそこにつながっている。

歳が改まった時、健三は一夜のうちに変わった世間の外観を、気の毒さうな顔をして眺めた。「すべて余計な事だ。人間の小刀細工だ」実際彼の周囲には大晦日も元日もなかった。悉く前の年の引き続きばかりであった。(百一)

今日はきのうのひきつづきであるだけなのに、人は「元日」という「小刀細工」によって外観をあらため、それでその内実も一新したつもりでいる。いずれまたそれが日常的な時間の中で風化してしまふことも自覚せずに。人に「お目出たうといふのさへ厭になる」主人公の意識は、「世の中に片付くなんてものは殆どありやしない」と吐き出すように苦々しくいう口調と同じものである。これに対して、赤ん坊を抱きあげて、「お父さまの仰おっしやる事は何だかちつとも分りやしないわね」と、その赤い頬に接吻する細君は、元日という小刀細工によって外観を改める世間の側にいる。『硝子戸の中』で、漱石の「病氣は継続中です」という説明を聞いて「笑談だと思つて笑ふ人、解らないで黙つてゐる人、氣の毒らしい顔をする人」もやはり同じ意味の世間の人たちである。彼等は「世の中に片付くなんてものはない」という言葉の苦々しさや、元日は人間の小刀細工だといつてこれを無視したい人間の気持を、漱石の病氣のことと同じ

ように、変人の個人的感想のように面白がったり、いぶかしく思つたり、氣の毒な人だと思つて聞くのである。それはまた、「今と昔又其昔の間に何等の因果を認める事の出来ない」(硝子戸の中)彼等でもある。

この彼等は、『道草』では、健三の細君や兄や姉や細君の父などという日常身辺の人間として、より身近に描かれる。日常的に継起する時間を無自覚にうけ入れて「まったく無意味に生を蕩尽してゐるだけ」(栖谷行人)の人人々である。彼らの生は、そういう意味で、(継続中)なのである。そういう彼らの生を軽蔑し、同列に交ることを嫌い、「真に偉大なもの」を希求する健三は、島田との再会を契機に、あらためて自己の存在の意味や根拠を、あるいはその人間関係の因果を、遠い過去に「記憶の探照燈」を向けて明らかにしようとする。しかし、そこに見出されたものは、自己の生の特権的な意味ではなかった。

もともと健三と彼等を隔てるものは、学問と教育であった。「教育が違ふんだから仕方がない」というのは、健三の対他意識であるとともに、細君や兄姉の側が、健三に距離を置く理由である。その選民意識が、彼を孤独にする。彼は「自分の勝手で座敷牢」に入つて、その書齋の孤独の中で、自己の継続する生の意味を自らに保証しようとする。

しかし、現在の彼の時間を特権的に意味づけるような生の根拠を、彼は過去の遠い記憶のどこにも見出しえない。自分は何の為に生まれてきたのか、そして自分はどこへゆくのか。「必竟どうする、必竟どうなる」という生への問いかけの中で見えてくるものは、「実

は自らの輕蔑の対象である他人と同一の平面に立っているにすぎない」(江藤淳)^③ 自己である。かくて彼も、周囲の人々と同じように、「徒らに老ゆる」自分をそこに見出さなければならぬ。

こういう健三の意識や位置の相対化から、『道草』の作品世界を「事実の世界への降服」(唐木順三)^④ や、「日常生活の側の完全な勝利の容認」(江藤淳)^⑤ として集約する視点が有力である。また、「生の現実において『一遍起ったことは何時迄も続く』という認識は、疑いもなく一つの開眼であり、悟入であった」(高田瑞穂)^⑥ というような視点で、即天去私につながるような作家の心境の一転機を見出す意見も多い。ここでは『道草』論にかかわってゆくことが目的ではないので、それらの論点について具体的に触れることは控えたいが、〈継続中〉という意識の連絡から考えると、そういう集約の仕方とはまた別の観点が生ずる。

知識人健三は、生活者としての細君との対比を中心に、周囲の現実的な生の中で相対化されてゆく。それがたしかに『道草』の世界であり、彼が「自らの輕蔑の対象である他人とは同一の平面に立っているにすぎない」自己をそこに見出すのも事実である。しかし終末の「世の中に片付くなんてものは殆どありやしない、一遍起った事は何時迄も続くのさ」と、吐き出すように苦々しい健三の意識は、やはり周囲の人間達と同一のものではない。そういう意味で、彼の意識はいぜんとして孤独である。

明治三十年代後半の一時期にさかのぼって、自らの生活を辿るように書かなければならなかった『道草』のモチーフとは何だろう。それについてはすでにふれたところでもあるが、あらためて考える

と、『こゝろ』から『硝子戸の中』『道草』とつづく大正三年から四年の作品には一貫した特徴がある。それは過去への関心、あるいはそれに関連する生の時間への意識である。

むろん過去への関心、拘泥というのは、この時期の作品に限られたことではない。「消えぬ過去」という言葉で、もっと早い時期からの漱石作品に底流するものを指摘した平岡敏夫の考察もある^⑦。しかし晩年の時期の作品では、これまでの作品に底流していたものが、具体的な関心、抱泥として全面に現れて来ているところが特徴的なのである。

先述したように、『こゝろ』は先生の過去の物語である。その過去が、時間を停止したようにその現在をおおいつくして、未来までも、その生を決定してしまう物語である。「『こゝろ』の隠された主題は自殺である」(柄谷行人)という言い方に倣って私流にいえば、「『こゝろ』の隠された主題は時間である。生の時間の意味である。日常的に継起する時間の中で、絶対的な時間を求め、生きつづけたような先生の生。その生を可能にするのが、自殺という手段であった。

小説の上で可能であったその絶対的な時間への憧憬や欲求は、『硝子戸の中』で、自らの生の時間への思索というかたちで検証される。「死は生より尊い」という、『こゝろ』の隠されたモチーフのような漱石の考えが、そこで示される。しかし現実の作家は、死によってその絶対的な時をとどめたいという若い女の問いかけに、時の力に下って生きることをすすめる。その一方で継続中という言葉を手がかりに、継続する生の意味を考える。

継続する生というのは、それが何等かの因果でつながっているということであり、意識がそれを明確に自覚し、その意味を把握しているということではなければならない。「継続といふことを解しない一般の人」を漱石は羨ましく思う反面、そういう無自覚な生に堪えられない己の意識を自覚している。むしろ「私の病気は継続中です」という説明によく自覚する作家の意識は、その説明の意味をよく理解出来ない人々の無自覚を憐れみ、危ぶんである。

「死は生より尊い」という考えに親近しながらも、その「不愉快に充ちた生」を生きつつけなければならぬところに、自己の生の位置を自得せざるをえない漱石は、あらためて継続中の自己の生の意味を、過去の生活の中に問う。くり返すようにそれが『道草』の境界であったがへ継続中」という意識の連絡の上からいえば、『道草』の終末は、その己の意識の再確認であったといっている。

「一遍起った事は何時迄もつづく」「たゞ色々な形に変わるから他にも自分にも解らなくなる丈」だという健三の片付かぬ思ひは、細君や周辺の人間達には通じない健三だけの思ひである。それは「継続といふ言葉を解しない一般の人々」を羨ましく思う作家の位置と変りはない。

この意味で、「生の現実において『一遍起った事は何時迄も続く』という認識は、疑いもなく一つの開眼であり、悟入であった」（高田瑞穂）という言い方には疑問がある。見てきたように同じ意味はすでに『硝子戸の中』の、継続中という言葉の説明で行われている。いやそれをいうなら、『道草』の終末は、明治四十三年の『門』のそれと暗合的に相似するのである。

『道草』の健三が、突然現れた島田との関係に悩まされるように、『門』の宗助も、妻のお米のかつての夫であり、自分の友人だった安井が満州から帰国して彼等の前に現れるという突然の話に、脅え苦しむ。結局安井は現れることなく去り、「小康は事を好まぬ夫婦の上に落ち」るのだが、宗助の配慮で安井の帰国を遂に知らずに済んだお米は、その或る日障子の硝子に映る麗かな日影をすかし見ながら、「本当に有難いわね。漸くの事春になって」と云って晴れ々しい眉を張る。しかし宗助はそれに対し、「うん然し又ぎき冬になるよ」と下を向いて答えるところで、『門』は終っている。

夫婦の位相は違うが、春になって有難いと喜ぶ妻に対し、然し又ぎき冬になると答える夫の意識の落差は、健三夫婦のそれと微妙に暗合する。春の到来を喜ぶお米の位置は、島田の件が片付いたのを喜ぶ健三の妻お住に重なる。春が来たばかりなのに、すぐ冬になるという宗助の言葉は、おそらくお米には理解できない。それは「世の中に片付くなんてものは殆どありやしない」という健三の意識と同じ位相にある。健三の意識が、「一つの開眼であり悟入であった」というのなら、宗助の、「ぎき冬になるよ」という生の認識はどう位置づけられるのか。要するに「片付くものなんてない」という意識がいまに始まるものでないことは『門』の例をとるまでもない。おそらく、漱石の自覚的な生のある部分からそれは固有の意識としてすみついてきたものである。たとえば、『継続中』という意識の先駆が、明治二十九年の「人生」で語られているように。

その眼でみれば、すぐ指摘できるように〈片付く〉〈片付かない〉というの、漱石が好んで用いた表現である。とくに日常の現実を

語る作品にそれが散見される。印象的なのは、その片付かない日常の意識と、その意識への慰藉を書いたような『文鳥』である。『文鳥』は明治四十一年の作品だが、『道草』の背景になっている漱石の生活は、この時代の雰囲気にならざるものを感じさせる。

片付かない現実とは、とくに明治三十年代後半から四十年代のはじめにかけて、漱石の生活に顕著であったと思われる。イギリスから帰国後の、心身ともにきびしく混沌とした現実が、作家的名声を得て一応の安定を得るまでの時期である。『道草』がその時代を対象として描かれるのは、自己の継続する生の意味を、その過去にある「何等」かの「因果」をたしかめる上で必然的であったのだろう。

「世の中に片付くなんてものはない」というのは、その時代のまぎれもない認識であったと同時に、大正四年の漱石の刻下の思いに重なるものであった。明治三十七年の現実とは、その遠い子供の時代の記憶にさかのぼり、そこから作品の中の時間をつないで、大正四年の作家の現実に継続している。少なくともそれがどのような意味で継続しているのかを、たずねたものだといっている。

三

『道草』の後に書かれたのは、大正五年一月一日から朝日新聞に断続的に発表された『点頭録』である。これも『こころ』以後一貫している過去への関心、拘泥をそのままひきついでいる。とくに『硝子戸の中』から『道草』『点頭録』というのはモチーフにおいて一線になるような印象がある。もっとも『点頭録』でそれを如実にしているのは冒頭の一章で、後は「軍国主義」「トライチケ」と当時

の欧州大戦に言及した文章となっている。しかしこれもおそらく未完の作品である。執筆中に左腕が傷んだということもあって、「トライチケ」の章で、執筆は切り上げられたようである。

注目されるのは『点頭録』の冒頭の、「また正月が来た」という一章である。元日から掲載される作品だから、正月の感想から始まるのは、自然だともいえるが、漱石の意図は単純にそれだけではなかったろう。『道草』の終末部でも、元日は人間の小刀細工だと、漱石は健三に言わせている。「また正月が来た」という言い方には、そこからひきつづくものが感じられる。それは次のように書き出されている。

また正月が来た。振り返ると過去が丸で夢のやうに見える。何時の間に斯う年を取ったものかと思議に感じる。此感じをも少し強めると、過去は夢としてさへ存在しなくなる。全くの無になつてしまふ、實際近頃の私は時々たゞの無として自分の過去を観ずる事がしばしばある。

この夢であり、無である過去は、大晦日も元日もない、「前の年の引き続きばかり」という意識の延長上にあるが、それが、「無」になつてしまふというのは、『硝子戸の中』や『道草』の時間の意識が、より抽象化し、深化したという感じがする。過去の記憶が、夢のような心持で回想されるというのは、『硝子戸の中』にも見られる心象だが、『道草』ではとくにそれが目につく。

健三は夢のやうに消えた自分の昔を回顧した。彼の頭の中には眼鏡で見るやうな細かい絵が沢山出た。けれども其絵には何れ（十九）

健三が、遠い過去の記憶をたどろうとするときに、共通するのがこの「夢のやうに消えた過去」を、また夢のように思い出すというあり方である。それは大抵、断片的に鮮明で、そして人の影がない光景というかたちでよみがえる。その「日付のついてゐない」記憶の断片と、現在の彼が、「何等の因果」（硝子戸の中）でつながっているのか、それがわからない。こういう夢と現実の関係も、すでに漱石に固有の意識として、早くからその作品に底流しているものである。とくに『様虚集』や『夢十夜』『永日小品』などの短編や作品の世界、とりわけ『倫敦塔』にその雰囲気濃厚である。

「前はと問はれると困る、後はと尋ねられても返答し得ぬ。只前を忘れ、後を失したる中間が会釈もなく明るい。恰も闇を裂く稲妻の屑に落つると見えて消えたる心地がする。倫敦塔は宿世の夢の焼点の様だ。」たとえばこれが当時の漱石の、塔のイメージの集約である。作者はこの塔見物について、どの路をどう通ってそこに辿りつき、さらにどのようにしてふたたびわが居所に戻ったか、判然としない、と言っている。ロンドンの貧寒な下宿の一室が、留學生の現実であったとすれば、倫敦塔も正しく一つの現実には違ひなかった。しかしこの現実と、かの現実をたどる道筋は消失してしまっている。漱石の孤独な留學生生活の現実の中で、倫敦塔の一日の記憶は、そこから脈絡を欠いた夢の中の現実、すなわち「宿世の夢の焼点」として刻印されるのである。

この記憶のあり方は、『道草』の中で健三がたどる記憶の中の光景と似ている。『道草』の時間は、そのイギリス留学の帰国後間もないところからはじまる。健三は「遠い所から帰って来た」という

書き出しは、その意味の指示するものを含めて、よく指摘されるところである。その意味で、『吾輩は猫である』とともに、漱石の処女作とされる『倫敦塔』と『道草』の世界の暗合は示唆的である。

またその意味に重ねていえば、『道草』の前年、大正三年の講演『私の個人主義』の次の一節なども注意される。

私は此世に生まれた以上は何かしなければならん、と云って何をして好いか少しも見当が付かない。私は丁度霧の中に閉ぢ込められた孤獨な人間のやうに立ち竦んでしまったのです。さうして何処からか一筋の日光が射して来ないか知らんといふ希望よりも、此方から探照燈を用ひてたった一筋でよいから先迄明らかに見たいといふ氣がしました。所が不幸にして何方の方角を眺めてもぼんやりしてゐるのです。ぼうっとしてゐるのです。

『私の個人主義』はこの後で、イギリス留学の体験から、「自己本位」という認識を得て、ようやく自分の方向が見えた、それが『文学論』の述作であると結ぶのだが、『道草』に描かれる健三の、自分はどこから来て、どこへゆくのかという不安な問いかけや、片付かぬ思いは、その「自己本位」という認識ではそれこそ片付かぬものであったことを、明らかにしている。

このような自己の存在の不安や不定の位置感、『倫敦塔』と並ぶ漱石の処女作『吾輩は猫である』に、すでによく露れている事情については、かつて述べたところであるが、あらためていえば、この事情を象徴的に示すのが、書き出しと結末の文章である。

吾輩は猫である。名前はまだない。氣がついたら薄暗いところでニヤァニヤァ泣いてゐた。

薄暗い、どことも知れぬところから猫の世界は始まる。明瞭な位置感がない。そういう生の意識から出発する『猫』の結末は、その主人公が水瓶に溺れて意識を失ってゆくという設定で終る。

次第に楽になってくる。苦しいのだが有難いのか見当がつかない。水の中に居るのだから、座敷の上に居るだけか、判然しない。どこにどうしてゐても差支はない、只楽である。否楽そのものさへも感じ得ない。日月を切り落とし、天地を粉齋こなせして不可思議の太平に入る……

無限の暗闇から一筋の照明が浮き上がるように或る生が始まる。どこから自分は来て、又どこへ行くのか、『猫』の死はふたたび位置感を失って無間の闇にとらえられる。この位置の喪失感、結局作品を底流する意識を象徴するが、その意識が、『倫敦塔』の作者の世界と照応するのも明らかである。

漱石の文学的出発を示す二つの作品に共通する不定の位置感や、現実と夢の関係の背景を、その生活的現実として説明し、あるいは検証しているのが、『硝子戸の中』や『道草』の世界だといつてもいいだろう。べつにいえばこれらの初期作品と『硝子戸の中』や『道草』は表裏の関係にあるともいえる。八人姉弟の末っ子として生れ、すぐ里子に出され、縁日の笹の中で泣いていたところから始めて、養家に出てまた実家に戻るといふ生い立ちの事情を語るのが、『硝子戸の中』であり、それを遠い時代の記憶として、そこに自らの生の根拠を追い求めたものが『道草』であった。われわれはそれによって、あらためて、漱石の処女作に底流していたものの意味を考えるのである。

もっといえば、その自己検証の試みは、すでにのべたように大正三年の『私の個人主義』や『こゝろ』から始まっていたといえるだろう。その検証される時代が、留学から帰国後の数年間、つまり漱石の作家的出発の時期に、つまりふり出しの時期を中心に行われているということが印象的である。

ちなみに、この大正三年から、五年の初頭にかけて書かれた一連の作物、『こゝろ』『私の個人主義』『硝子戸の中』『道草』『點頭録』に共通する過去への視点で、とりわけその意識を鮮明にするのが『探照燈』という言葉である。この言葉については『道草』を中心にした中島国彦の言及があるが⁹⁾、この言葉の範囲は、フィクション虚構としての体裁が明瞭な『こゝろ』を除けば、他の作品のモチーフを一括するものであったといつても過言ではない。さきに引用した『私の個人主義』の文章に「此方から探照燈を用いてたった一筋でよいから先迄明らかに見たいという気がしました」とあるのはすでに見た通りである。『硝子戸の中』に、その言葉はないが、〈継統中〉という意識に集約される作者の眼は、つねに自己の過去の記憶と、その意味に及んでいる。そして「『道草』の世界は確実に『硝子戸の中』の世界を自己の内部に取り込んでいる」(中島国彦)¹⁰⁾が、その『道草』には、「古い額を眺めた健三は、子供の時の自分に明らかかな記憶の探照燈を向けた」(四)という一文がある。その言葉が最も印象的に用いられているのは、最晩年の『點頭録』の次のような一節である。

――過去は夢所ではない。炳乎として明らかに刻下の我を照らしつゝある探照燈のやうなものである。

しかし『点頭録』におけるこの言葉の意味を明瞭にするためには、あらためてその冒頭の文章に戻らねばならない。

四

くり返すように『点頭録』は、また正月が来たという文章で始まるが、そこで振り返られる過去は、「丸で夢のやうに見える」ところからさらに「夢としてさへ存在しなく」なり「全くの無になつてしまふ」と書かれる。この「夢のような」過去が「全く無に」なるというのは、「近頃の私」の実感として書かれている。たとえばつか上野へ展覧会を見に行った時、電車に乗ったり降りたり、それから靴で大地の上をしかと踏んだ記憶をたしかに持ちながら、私は自分の足が「未だ曾て一寸も動いてゐないのだと考へたり」する。その気持を漱石は、「終日行いて未だ曾て行かず」というような気持だと書いている。

漱石はこれを六づかしい哲学的な言葉でいうと、「畢竟するに過去は一つの仮象に過ぎないといふ事にもなる」といい、さらに次のように説明する。

——当来の念は悉く刹那の現在からすぐ過去に流れ込むものであるから、又瞬間の現在から何等の段落なしに未来を生み出すものであるから、過去に就て云ひ得べき事は現在に就ても言ひ得べき道理であり、また未来に就ても下し得べき理屈であるとすると、一生は終に夢よりも不確実なものになつてしまはなければならぬ。

これが、元日はきのうのひきつづきにすぎないとし、これを人間の小刀細工だとした『道草』の健三の意識の延長上のものであるこ

とはすでに書いた。それはまた「世の中に片付くなんてものはありやしない」という健三の意識にも通ずるものである。しかしまたそれをひっくり返して「一生は終に夢よりも不確実なもの」で「暦と鏡の仕業」による時間というものは全く「無に等しい」と言い切っているのが、これまででないところである。

しかしそう言いながら漱石は、一方で次のように書く。

驚くべき事は、これと同時に、現在の我が天地を蔽ひ盡して儼存してゐるといふ確実な事実である。一挙手一投足の末に至る迄此「我」が認識しつゝ絶えず過去へ繰越してゐるといふ動かしがたい眞境である。だから其處に眼を付けて自分の後を振り返ると、過去は夢所ではない。炳乎として明らかに刻下の我を照らしつゝある探照燈のやうなものである。従つて正月が来るたびに、自分は矢張り世間並に年齢を取つて老い朽ちて行かなければならなくなる。

過去は夢であり、無であるという考えと、過去は炳乎として明らかに刻下の我を照しつゝある探照燈だという考えは、対立する。過去を無としていえば、正月を迎えるということになんの意味もない。しかし、有とすれば、年を加えて老い朽ちる自分を意識しなければならぬ。しかし一見対立する此の二つの見方は、「同時にしかも矛盾なしに両存して」いると漱石はいう。そして「普通にいふ所の論理を超越してゐる異常な現象に就いて、自分は何も説明するつもりはないし、解剖する手腕も有たない」といつて次のようにつづける。

——ただ年頭に際して、自分は此一体二様の見解を抱いて、わが全生活を、大正五年の潮流に任せる覚悟をした迄である。

この「一体二様の見解」が、「普通にいふ所の論理を超越して」

「同時にしかも矛盾なしに両存して」いるというのは、漱石のかねてからの考えであるのか、あるいは当年の漱石がここに来て得た認識ということになるのか。

たとえば、〈継続中〉という意識にはこの両様の意味が併存しているともいえる。さきはこの言葉には物理的に継起してゆく時の流れの継続と、その日常的に継続する生がかかえている「不測の変」の両意があると書いたが、これをへ一体二様の生〉の見解に当てれば、物理的に継起する時間というのは、当来の念は悉く刹那の現在からすぐ過去に流れこみ、瞬間の現在から何等の段落なしに未来を生み出す、という考え方に通ずるように思われる。つまりこの考え方で見れば、「一生は終に夢よりも不確実なもの」になる。

しかし、物理的に継起してゆく時間を無自覚にうけ入れて、ついに一生を夢のように送ってしまうという意味で用いられる〈継続中〉の生とは、漱石から見れば、その〈継続〉という意味を解しない、一般の人達のことであった。それはまた過去は夢であり、無であるという認識を持ちえぬ多くの人達のことでもある。漱石の見解は、「過去は一の仮象に過ぎない」という哲学的な認識にまで至るものである。彼私の意識には大きなちがいがあつた。しかし、結果的に、過去は夢であり、無であると観ずると、それを自覚せずに、夢のように一生を終わってしまうとの間に、どういふ違いがあるのだろうか。

同じ意味で、過去は夢所^{ところ}でなく、柄平として明らかに刻下の我を照らしつつある探照燈だというのは、自己の生の継続とそれがかかえる「不測の変」をつねに意識し、その「何等の因果」を把握しよ

うとする生の意識に符合するものようである。しかしそういうかたちで生の継続を意識するものが、正月が来るたびに、世間並みに年齢^{とし}を加えてゆくことを考えるというのは違う立場のように思える。それは『道草』の健三のように、元日を人間の小刀細工などと思わない、日常的な時間の中に生きている人々のものである。

そういう意味では『道草』のかたづけかぬ意識もへ一体二様の生〉の見解のどちらに当るのか。かたづけかぬ生の意識というのは、刻々に継起し、入れかわってゆくだけの時間、つまり過去現在未来という時間軸が本来無意味に近い生の世界では、はじまりも終りもないのだということも言っているようでもあるし、一方、過去がいくら夢であり無と観じられても、現在の自己が儼然として在り、その自己を存在せしめる過去の因果というものがあるかぎり、その関係はいぜんとして片付かない、すなわち〈継続中〉なのだということを示しているようでもある。

共通して用いられているような「探照燈」という言葉も、存在の霧に一筋の方向を見出すために用いたいという「探照燈」(私の個人主義)や、「子供の時の自分に明らかな記憶の探照燈」(道草)と、「柄平として明らかに刻下の我を照らしつつある探照燈」(点頭録)の意味は必ずしも同一ではない。

あらためていえば、〈継続中〉や〈片付かぬ〉という生の意識は、「探照燈」という言葉も含め、つねに二重の意味を伏在させているように考えられる。それは存在の現実と過去を結ぶ生の時間に対する二重の意識である。刻下の我を我たらしめている過去の時間の経緯というものを否定することはできない。しかしその過去を遠くま

でたどることによってそこに「何等の因果」を見出し、そこに自己存在の意味を求めようとすれば、記憶は茫然として因果の脈絡を失い、鮮明な夢の断片の如きものと化してしまふ。過去に向けられた探照燈は、一方で刻下の我を明らかに照らす現実の照明であるとともに、「丸で夢のやうに見える」過去を闇の中から浮き上らせる。これはすでに『倫敦塔』や『猫』以来の世界に対応する、夢と現実の関係である。

この夢と現実の背反的關係、あるいは過去と現在をつなぐ意識と、断絶する記憶の二重構造は、『點頭録』における〈一体二様の生〉という見解で、あらためて明瞭にされたように見える。その「論理を超越してゐる異常な現象」は、〈継統中〉や〈片付かぬ〉生の意識を経ることによって、「同時に、しかも矛盾なしに両存している」ことが、漱石において可能になつたのではないか。

その意味で、〈一体二様の生〉の見解は、『硝子戸の中』や『道草』における生の意識をひきつぎながら、その思いはどこかわりきれて、つきぬけた認識に至つたことを示しているように思われる。たとえば、正月を人間の小刀細工だと苦々しげにつぶやく健三の表情はここにはない。

苦し無に即して云へば、自分は今度の春を迎へる必要も何もない。否明治の始めから生まれないのと同じやうなものである。

然し有になづんで云へば、多病の体が一年生き延びるにつけて、自分の為すべき事はそれ丈量に於いて増すのみならず、質に於いても幾分か改良されな限らない。従つて天が自分に又一年の寿命を借して呉れた事は、平常から時間の缺乏を感じて

ゐる自分に取つては、何の位の幸福になるか分らない。(中略)
—古佛と云はれた人の真似も長命も、無論自分の分でないかも知れないけれども、羸弱なら羸弱なりに、現にわが眼前に展開する月日に対して、あらゆる意味に於ての感謝の意を致して、自己の天分の有り丈を盡さうと思ふのである。

『硝子戸の中』の作者は、死は生より尊いと信じ、絶対的な時を憧憬しながら、「不愉快な生を超越できなかった」自分を嘆いた。『点燈録』の作者は、天が自分に又一年の寿命を借してくれた事を、何の位幸福になるか分らないと感謝し、自己の天分を尽そうと決意する。一年生き延びることは、それだけ為すべき事が量において増すことになるのだが、ここには生のかたづかなさを嘆く、健三の苦々しさもない。

〈一体二様の生〉の見解は、「普通にいふ所の論理を超越してゐる異様な現象」だと認めながら、それが「同時にしかも矛盾なしに両存して」いることについて、自分は証明する積もりないし、解剖する手腕も有たない、という。この淡々とした現象の容認は、〈継統中〉の生の意識への抱泥や、〈片付かぬ〉生の意味の解明を過去にさかのぼつて執着する不安な自意識の位置とは異なるものを感じさせる。

時には自分を無と観じながら、一方で年の延びたことを素直に喜ぶ自分を、そのまま肯定する『點頭録』の自意識の位置には短い文章だが、これまでにない自在なものを感じる。矛盾を当然の現実として容認しようとする〈一体二様の生〉の見解は、その意味で、この時期の漱石の精神の位置を象徴的に示していると思われる。要は

それがどういう意味の自在さなのか。それが『道草』を書いた作家のどういう精神の過程を語るものなのか、その答をわれわれは、い
ずれ『明暗』の世界にたずねなければならぬだろう。

注

- (1)(2) 柄谷行人「意識と自然」(『漱石論集成』一九九二、
第三文明社)
- (3)(5) 江藤 淳『夏目漱石』 昭和三二、東京ライフ社
- (4) 唐木順三『夏目漱石』 昭和三二、修道社
- (6) 高田瑞穂『道草』解説(『近代日本文学注釈大系
夏目漱石集Ⅲ』角川書店)
- (7) 平岡敏夫『漱石序説』昭和五一、塙書房
- (8) 安東璋二『吾輩は猫である』論(『私論夏目漱石』
平成七、おうふう)
- (9)(10) 中島国彦『道草』の認識(『国文学研究』59集 一
九七六・六 早稲田大学国文学会)